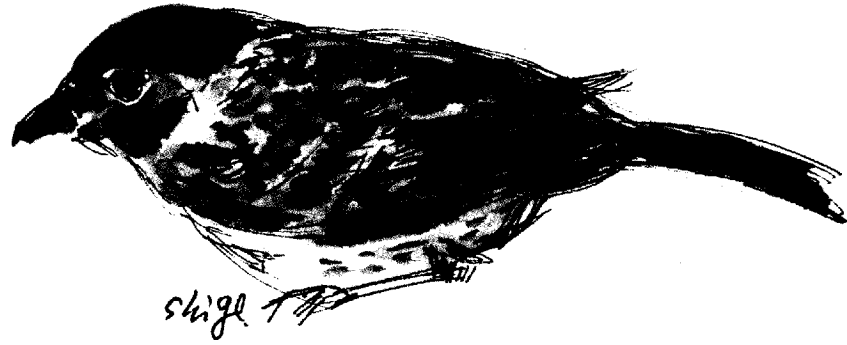


季刊 連句 第7号



連句元年(南柏雜記5) .....	1	
『付方自他伝』注解(下) .....	東 明 雅 .....	2
武翁 傳 .....	杉 内 徒 司 .....	6
春 山 文音四吟 .....	(文)岡 本 春 人 鈴 木 春 山 洞 .....	10
山荘の湯 .....	捌 東 明 雅 (文)大 畑 健 治 .....	12
絶頂の城 付勝練習歌仙 .....		14
武翁賞経過報告 .....	3 質疑応答 .....	9
一泊二日三歌仙(箱根張行) .....	杉 江 杉 亭 .....	16
第四回俳諧芭蕉忌 .....	主催(第11回・猫蓑会) .....	18
「海くれて」五歌仙捌 東明雅 杉江杉亭 雜賀 遊 山口みづゑ 市野沢弘子		
連句会案内 .....	21 雁帛往来 .....	21

表 紙 ( 雀 ) 岩 満 重 孝

連句元年  
南柏雜記 5

新しい連句の出発点を昭和四十五年(一九七〇年)とするのは、大畑健治さんの説(国文学解釈と鑑賞昭和五十八年二月号所載)であるが、言われてみるとなるほどと思う点が多い。大畑さんはその論拠として、「同年六月創刊の『すばる』誌上に、安東次男の『芭蕉七部集評釈』が斬新な文体で連載され始めたことと、同年四月に東明雅のいた松本市で芦丈三回忌が催され、昭和の連句復興運動が提唱されたことである。」と述べられている。

芦丈三回忌については暫らく措くとして、安東氏の当時の動静について、「俳句研究」(昭和五十九年八月号所載)の「現代における連句の意義」で平井照敏氏が「そういえば、安東次男氏が、丸谷才一や大岡信らと連句をはじめ、いまの詩人は孤独の仕事ばかりしていて、仕事が息苦しくなっているから、連衆の遊びをして、それをほぐすのだと、しきりに言っておられたのは、昭和四十年代の半ば頃

だったように思う。」と書いておられるのと、さきの大畑さんの説と全く符節を合わせていると言ってよいだろう。

さらに、この当時、安東次男氏をはじめ詩人たちの気分を語るものとして、大岡信氏が「朝日新聞」(昭和五十九年八月十三日付)に次のように書かれたのが、きわめて印象的である。即ち「現代詩は、その発生の端緒である明治の新体詩以来、古典的詩歌伝統に対する異端者の立場に立って歴史をきざんで来た。とくに大正後半期以後、昭和戦前・戦後を通じ、現代詩を導いてきた重要な思想のひとつは、詩こそ文学・芸術全体のなかでたえず前衛的な位置に立つべきものであり、現に立っているのだという自負の念があったと言えるであろう。しかし、その自負の念は、一九六〇年代末期の大学紛争を重要な区切りとして、七〇年代以降の現代詩の世界からは静かに退潮して行った」

これが結局は連句を浮上させた世の大勢であった。そもそも、連句を復興させることは先師根津芦丈翁の悲願で、一生をそれに費されたと言ってよい。しかし、昭和四十三年(一九七八年)に九十五歳の生涯を閉じられた翁は、もう二・三年のことで、この連句復興の実況に接しられなかつたのである。

# 『付方自他伝』注解(下)

東 明 雅

- 6 (打越) 葉のなづむ弥生つれなき (自)  
 (前句) 一言もいはで日中の御垣守 (他)  
 (付句) こぼれ松葉を手にさぐり居る(他の会釈)  
 右の場合、打越は「葉がはかばかしく利かず、せつかくの弥生もちつとも面白くない」という自分の心中を述べているから、人情自の句である。それに対して前句は御垣守(御所を守る人)の動作を客観的に述べた人情他の句である。要するに自の句に他の句が向いあわせに付けられている。このような場合の前句は前句の人(御垣守)の動作をこまかに描写して、その御垣守が一日中一言もしゃべらず、こぼれ松葉を手にもてあそんでいるという風に付けてもよい。これを他の会釈(アツライ)という。
- (打越) 葉のなづむ弥生つれなき (自)  
 (前句) 一言もいはで日中の御垣守 (他)  
 (付句) ほろりほろりと屋根葺の塵 (他)  
 また、同じ自他の打越・前句に対して、右のように、前句の人(御垣守)とは全く別人(屋根葺)をもって来て、

- これも向い合わせ付けることもできるのである。要するに前句が他で、打越が自の句である場合、付句が前句に戻らぬためには、他の会釈を付けるか、全く別の他を付けるかしなければ、打越から転ずることはできないのである。
- 7 (打越) ひとつづつ手本囉うて粽ゆひ (他)  
 (前句) しかる局に笑ふ局に (他)  
 (付句) よろよろと裾に筵の下向道 (他の会釈)  
 このように、打越と前句とが共に他の句として向い合わせ付けて付られている時は、付句はさらにその前句の会釈の句を付けることができる。これはもちろん他の会釈になり、打越から三句他の句が続くことになるが、最後が会釈の句ならば差支えない。そして、その三句とも、誰か別に見ている人がいるというわけである。
- また、打越他・前句他とあった場合、自の句を向い合わせにつけることも可能である。
- (打越) ひとつづつ手本囉うて粽ゆひ (他)

- (前句) しかる局に笑ふ局に (他)  
 (付句) 染ぎぬを思ひのままに売おほせ(自)  
 これは、前句の局たち、機嫌のよい局もあれば悪い局もあるというのに対して、お出入りの商人が、商売物の染絹を思い通りに売ってしまった満足感を向いあわせに付けているのである。
- 8 (打越) 鯨突一二の銚をあらそひて (他)  
 (前句) 無分別なる顔に雪降る (他の会釈)  
 (付句) あのやうな小庵かなと思ふまで(自)

このように他の句に他の句の会釈が付いた時は、その会釈の句はどのようなものになり得るか、その点をはっきり見定めてから、いわばどのように見立て替えてできるかをしっかりと見定めてから、それに叶った自の句を付けるのである。この点が曖昧であると、二句がらみになり、変化がなくなつて、一続きのものとなつてしまうのである。これを

- 「見出しの自むかひ」と言うのである。別の例をあげるならば、
- (打越) 禪ながらに嫁のすり臼 (他)  
 (前句) 櫛入れぬ髪にも艶は生れ付 (他の会釈)  
 このように前句はすり臼をひいている嫁の会釈で、その嫁が髪の手入れもろくにしないけれども生まれつきの艶があつて美しいというのであるが、その櫛を入れぬ髪といふところから、それを公事(訴訟)人の上のことと見定めて、次のような付句をする。
- (付句) あはれに成て公事がさばけぬ(自)

即ち、これはやつれても美しい公事人を見た奉行の気持ちを述べた自の句である。このように、前句の他の会釈をどのように見立替えてできるか、ここが重要なのである。以上、1から8までの付方が北枝が考えた付方自他伝の骨子である。彼はあと数例あげて特殊な場合の付け方を説

## 武翁賞経過報告

昨年六月創刊号で、武翁賞について発表して以来、一・二の応募作品をはじめ、猫蓑、A・C・Cの作品、あるいは個人の文音なども含めて検討して来たが、未だ「季刊連句」をリードするような新作品の出現はなかった。すべての作品がある程度まで完成していることは認めるが、真に優秀と目する作品がなかったのだ。

ある。審査員三名相計った結果、「今年度は該当者なし」ということになった。残念であるがよい加減で妥協するよりはよかつたと思う。

来年度は、諸兄姉の努力によって、真にすばらしい作品の出現を期待するものである。

草間時彦  
 杉内徒司  
 昭和五十九年十月  
 東 明雅

明しているが、これらはいわば、応用編であり、一応、基本的なものからは外してもよいと思われる。そしてその前に、北枝が言い落した大切なものが一つある。それは打越が他、前句が自の場合は、付句は自という法則である。そして、この項を補足したのが白雄の寂葉の中に出てくるから、ここで掲出しておこう。

9 (打越) 卷わらに弟もむかふ手束弓 (他)  
 (前句) うき世の中もたのもしき哉 (自)  
 (付句) 西國をうてば都も旅なれや (自)  
 これを加えて図表を作れば次の通りとなる。

	打越	前句	付句
1	人情自	人情なし	人情他(又は人情なし)
2	人情他	人情なし	人情自(又は人情なし)
3	人情なし	人情自	人情自又は他を付ける
4	人情なし	人情他	人情他又は人情自を付ける
5	人情自	人情自	人情他(又は人情なし)
6	人情自	人情他	人情他(又は人情なし)
7	人情他	人情他	人情自、又は他の会釈(又は人情なし)
8	人情他	他の会釈	人情自(又は人情なし)
9	人情他	人情自	人情自(又は人情なし)

付けるわけにもいかず、また、花守を付けるわけにもいかないで、付近で水垢離を取っている連中の様子を付けて変化をはかるより手はないと言っているのであって、これに類する場合も多いであろう。

次の二つの例は、図表の5の特殊な場合である。

B (打越) 身は雲水のさまさまな秋 (自)

(前句) 笠舟に寝られもやらぬ闇深き (自)

(付句) 女の声で迷ひ子を呼ぶ (他)

即ち、「身は雲水のさまさまな秋」という句を舟の上での述懐と見て、「笠舟に寝られもやらぬ闇深き」と、淀の三十石舟を思い出させるような句を付けた時、その次は、必ず陸上の人物と思われるものを向い合わせに出さなければならぬというわけである。「女の声で迷ひ子を呼ぶ」というこの付句は、前句の「闇深き」とひびき合ってよい付味であるとともに、打越の雲水からは大きく転じたよい付句であるが、この心得は舟のみに限らず、特定の印象ぶかい場所が前句に出た時は、打越からの変化について十分注意すべきであろう。

C (打越) 編笠にしのげと夕日かかはゆき (自)

(前句) おくれし連に心ひかる (自)

(付句) 煙草の火くれて内簾は元の機 (他)

これを説明して、「かやうに連と出ても、そこに居ぬ人ならば、やはり自の句にして、他の句を向はせて付べし」と北枝は述べている。これも尤のことで、自他の解釈は大変難しいものであるから、よくよく一句の意をかみしめて

さらに言えば、

	打越	前句	付句
10	人情なし	人情なし	人情自又は他を付ける

の項も補うべきだろう。北枝の時代までは人情なしの句は何句続けてもよかったようであるが、これが白雄の寂葉には、「人情なき句三句つづくはあしし」とはっきり否定されている。

これは人情なしの句ばかりでなく、人情他の句、人情自の句もすべて三句続いてよいものはないのである。付方自他伝の真髓もそこにあるので、上に述べた図表などを苦勞して暗記する必要は全然ない。要するに三句同じものが続かないように変化しなくてはよいのであるから、こんな簡単な理屈はないのである。

北枝の付方自他伝には、さらに次のような三つの特別な場合の付け方に対する説明がある。

A (打越) 花守に花の短尺望まれて (自ニモ、他ニモ)

(前句) さても長閑に扱もうぐひす (時節)

(付句) 水上は懺悔々々とぬるませる (他)

打越の(自ニモ、他ニモ)というのは、一句の中に、他の花守と、その花守に短尺を所望されている自と、二つがあつてどちらとも決めかねる場合であるが、これを現代では自他半と呼んでいる。前句に時節とあるのもおかしく、これは当然人情なし、場の句と見てよい。右のように、自他半の句が打越にあり、場の句が前句に出た時は、自の句を

判断しなければならぬ。

以上で付方自他伝の注釈を終る。はじめてこの文章を読まれて、付方自他伝に接しられた方は、なんと面倒な法則だろうと呆れられる方があられるかも知れない。しかし、それは誤解であつて、この付方自他伝の根本原則さえしつかり把握できれば、大変簡単なのである。その原則とは何か。

1 連句のすべての句を人情自、人情他、人情なしの三つに分ける(自他半のことは省く)

2 人情のある句は一句で捨てず、必ず二句以上続けるが、その続け方は自と他とが打越にならぬよう注意する。

3 人情なしの句は一句で捨てよく、二句までは続く。この三つさえよく理解しておれば、付方自他伝のいう所もよく分かるであろうし、作品にすぐ応用できるのである。最後に、この付方自他伝は何のために作られたかについて、考えてみたい。付方自他伝は三句の転じをスムーズにするための一方法にすぎない。三句の転じが十分にできる人ならば、この付方自他伝は不用である。その点で付方自他伝を式目と同一に考えるのは不可である。式目は連句を作る時の法則であるが、付方自他伝は決して法則ではない。だから、付方自他伝に背いても、三句の転じ、変化さえ付けられて居れば、それで十分なのである。ところが、初学の人は三句の転じと言っても分からぬので、付方自他伝を教えれば、最低の三句の転じを得ることが出来る。そういう便法であることをよくよく考慮しておかねばならない。また、付方自他伝にこだわる余り詩情を失なうこともある。琴柱に膠する愚を避け、自由に活用すべきであろう。

# 武翁傳

杉内徒司

武翁は本名三井武夫、明治四十四年一月二十三日生れ、甲府市外竜王町出身。

大正五年四月慶応義塾幼稚舎に入學。普通部から、予科へはゆかず、芭蕉研究を志して昭和二年四月第一高等学校へ進む。同期に今も活躍している評論家・土屋清、俳優・山村聡がいる。

大学は、父（東京市電気局長）が、武翁の文学志望を許さず、止むなく東京帝国大学法学部法律科を選ぶ。その卒業の前の五月九日、慶応普通部時代の二年先輩で顔見知りだった調書五郎（廿四歳）が、大磯町の酒田山で湯山八重子と心中した。

それが、広く世人の関心をひいて、「天国に結ぶ恋」という流行歌も生れ川崎弘子主演で映画にもなったが、その作詩者、西條八十が九年後、武翁の岳父になるのだが、それは「天国に結ぶ恋」の歌詞の一節のように「神様だけが

御存知」で、彼が知る由もなかった。学卒えて、昭和八年四月大蔵省に入り、銀行局に配属される。

昭和十五年四月二十四日、西條八十の娘嫩子と結婚。新郎三十、新婦二十一。

当時の風潮として、若きエリート官僚は上司の娘をもらうのが常だった。武翁が詩人の娘と見合結婚したのは、嫩子とびっ切り美人だったせいであろう。

「主人はだいたい出世の点で損をしたでしょうね、私のような詩人の娘をもらったのは」

と、日本詩人クラブ会長をされ、いまでも美しい嫩子女史からある時私は直接聞いたことがある。

それから武翁はひたすら大蔵官僚の道を歩いた。後に事務次官となった舟山正吉の後任として金融局長次長在任中、はからずもおきた昭電事件で、福田赴夫に殉じて彼は退官した。

二十八年八月、日本専売公社理事就任、二期つとめる。

三十三年七月農林中央金庫理事、三十五年五月から四十四年三月まで同副理事長。

農中をやめてからは、その頃新装竣つた国立劇場の理事。しばらくして日本開発銀行監事となったが、その在任中不慮の死をとげた。享年五十八歳。

不慮の死とは、故あって四十三年九月五日失踪、遺体となって十一月十八日発見されたのだ。

戦後高位高官の失踪としては、三笠宮妃の父高木子爵に次ぐ第二の事件として、その当時新聞・週刊誌に「謎の事件」と書きたてられた。

## 二

武翁が連句実作に手を染めたのは三十一年の冬のことである。

日本専売公社時代、一高時代の旧友二人を世田谷成城の自宅に招いて初めて試みた歌仙の表六句は左の通りである。

庭清く雪は残してありにけり  
風なほ寒き世田谷の奥  
今世のめでたき女優隣にて  
羽根つく子等の袖の長さよ  
同じ家に行きあたりたり臙月  
丁字の匂三味線の音

（『朴の花』）

武翁  
卓

順  
卓  
翁  
順

こんな稚い作品から出発した武翁は、農中時代無名庵十九世寺崎方堂の指導を受けたが飽きたららず、後都心連句会で信州伊那の根津芦丈の鉗鎚を受けるようになって、ようやく自律・開眼するに至った。

## 三

武翁が松本市在住の東明雅と出会ったのは、都心連句会主催の芭蕉翁二百七十回忌。それは昭和三十八年十一月九日である。

芭蕉の志すところを志す二人に忽ち深い友情が生れる。明雅の最初の大作『連句入門』の原稿に、武翁が丹念に朱筆を加えたりしたことも想い出される。

この『連句入門』は、時機が熟さず、ついに上梓されなかつたが、その第一章「連句への招待」は私が創刊した『連句界』（第一号）（昭和四十四年十月一日発行）の巻頭を飾っている。

東明雅は武翁連句を次のように評している。

「武翁の連句は、非常にひろい題材をこなし得ている。ただ、強いて言えば、一句の切り取り方、トリミングがややあまいような気がする。一体に穏やかな句が多く、時に機智的で洒落れているのは、武翁の人柄のあらわれである。そして彼の連句の特色は、前句と付句との付味・付肌

にあるのではなからうか。

(中略)

今日の連句の多くは、一句一句の面白さ、三句続きの物語的興味に重点が置かれ、前句との微妙な付味・付肌、そして三句目の転じなどは、軽視され、無視されているのではなからうか。文学の制作・鑑賞に不易と流行があることは、夙に芭蕉の指摘した通りであるから、一句仕立の連句が流行する今日では、武翁連句の折角の付味・付肌も高い評価を受ける可能性はすくなくも知れない。

けれども誰が何と言おうとも、連句の文芸性の最大のもの、前句と付句との間に、かそけく通いあい、絡みあう付味・付肌にある。流行の風向きがまた変って、付味・付肌を重視するような時が来たら、武翁の作品のよさも、改めて見直されるだろう。

(武翁余焰『杏花村』52年11月号)

明雅は五十六年四月から今日に至るまで、朝日カルチャーセンターで「連句の理論と実作」を教えている。

明雅はこの講義で、しばしば、

「先師芦丈先生の教えられたことは……」  
と話されるので、受講生はいつのまにか芦丈の名を憶えるに至っている。

この講座は半年が一コースで、この五年間に学んだ者は五十余人。

この連衆は「猫蓑会」という組織をつくって、教室外でも研鑽も積んでおり、この集団はやがて薫風連句の伝統を

支えゆき、信州の片田舎の俳諧師芦丈は芦丈が存知もよらなかつた連衆からも語りつがれてゆく事であろう。

余談だが朝日カルチャーセンターでは、来春一月から名古屋でも、美濃派の重鎮国島十雨を迎えて開講されるという。

芦丈に生前叙勲の話がおきて、地元信州、東京双方でいせんの動きが始って間もなく、芦丈は病床に臥すようになった。何しろ九十三歳のご高令でもあった身だ。

この動きは病床の芦丈の耳にも入った。

芦丈は「勲章を貰う日のために寝床で坐る練習をされた」  
(小出きよみ『花野』)

これは生前ついに間に合わなかつたものの勲五等叙勲の榮譽を享けたのは、主として高位高官の経歴をもつ三井武夫の働きによる。

この約四年あと、大磯の鴨立庵主をつとめた鈴木芳如に周辺から叙勲運動がおこり、やがて勲六等と結実した。

俳壇における功績において、根津芦丈と鈴木芳如との優劣の差は誰にもつけ難いが、この差はせいせん者の社会的な地位の差に基くものであろう。

東明雅は五十八年三月『季刊連句』を創刊する折、連句奨励のため賞を設けることを思い付き、それに武翁の名を付けた。それは武翁を深く悼む友情のあらわれであろうと私は感謝している。

感謝という意味は、私はその武翁にみちびかれて、俳諧の世界に遊べるようになった一人であるからである。

## 質疑応答

「自他無」と「場」の違い

問 新刊の『連句の楽しみ』(暁峻康隆・宇咲冬男著)に「自他半」を説明して、「一句の人物の意味が自分とも他人ともとれる句」としてありますが、この説明は「付方自他伝」の「自ニモ、他ニモ」に当るので、「自他半」というのは、自と他を含めた複数の人物を指すのではないのでしょうか。また、同書に「自他無」というのがあり、「場」との違いがわかりません。

夏の落葉の軒にはらりと 場

湖借景に深みゆく秋 自他無

(同書一八八—一九〇頁)

(東京都 馬場東夷)

答 自他半とは「二の尼に近衛の花のさかりきく」(冬の日)のように、自と他を含めた複数の人物を指して言います。「付方自他伝」に「花守に花の短尺望まれて」(自ニモ)とあるのは、現在では自他半のことです(三頁参照)。なお、この外に一句と

して自にも他にも解される句があります。たとえば「日のちりちに野に米を蒔る」(冬の日)などは、一句としては自分で稲を刈っているとも、他の人が刈っていると解釈ができ、打越・付句をよく参照して自他を判別すべきでしょう。

右は私が芦丈翁から受け継いだ伊勢派の考えですが、他門の教えは存じませんので、御質問に対し、全体的なお答えは残念ながら出来かねます。その点御了承下さい。(東 明雅)

連衆名の表記について

問 季刊連句を拝見しておりますと、連衆名の書き方がまちまちなのに気付きました。正しい表記の仕方をお教え下さいませ。

(東京都 とく名希望)

答 連衆の名前は一巡までは名前を書き、それ以後は名前の下一字を書きます。女性名で何子と子の多い場合は、上の字を書き、三字名のときは一番上の字を書くのが普通です。(東 明雅)

問 第十回猫蓑会四歌仙を拝見します

と、「野だいこ」とか「法界坊」とか、現在社会にあり得ないものが登場しますが、そういうことは許されるのでしょうか。

(神奈川県 北島千代子)

答 芦丈先生のお教えでは、

「あるものはつく。ないものはつかない」ということがあります。現在社会で使われていないもの、例えば「砧」とか「駕籠」とかは嫌うほうがよいでしょう。

「野だいこ」は、数少いけれども現存しています。

「法界坊」は前句が「拆の鳴りて」とあって、歌舞伎の場面であることが明確だったのでかまわないと思います。

ただ、前句が舞台でない場合、付句のみ歌舞伎のようなものを登場させると、それはどんなことでもお芝居にすることができるので、芦丈先生はそれを厳しく禁じ、いましめられました。

つまり、歌舞伎もどきのものをつけると、すべて絵空事になり易く、そのまま流れてしまいがちのことをおっしゃったのだらうと思います。(東 明雅)













太鼓どろどろ黒子右往左往  
馬冷せせせらぎ浅く織き月  
昨日も今日もぼんやりと過ぐ  
吾等かく亡ぶを見よとツイスコンテイ  
円柱高く立ちならぶ丘  
笙の笛みやびにひびく花御堂  
綿船車まわす永き日  
しやぼん玉αβに飛ばす人  
蛇がしきりにまつわりて来る  
知らぬ間にビニール傘のまたふえて  
鍵渡したる数は内緒に  
イヤリングの男ベツトに胡座かき  
寸借詐欺に鼻毛抜かるる  
懺悔文朝夕誦して冬深む  
丸々胸をふくらます鳩  
若鳥津綱取り目ざす場所迫る  
天塩振つて落鮎を焼く  
黒猫の金の目光る月明り  
みんな持つてるすすきみみづく  
萩の庭ごぼれしものを積みためて  
招待客の席を定める  
甲比丹の南蛮屏風のうれひ顔  
山々笑ひ雲浮びをり  
花びらを折目疲れし地図に受け  
くまがい草のふくらみし夢

一枝 海くれて 市野沢弘子 捌  
一 海くれて 鴨の声ほのかに白し 翁  
同 風をめぐらす大寒の松 弘子  
枝 冬座敷覗し顔の揃ひあて 弘子  
枝 封筒開き写真散らしぬ 孝子  
夷 憧れの月のロケット子等の乗り 彬風  
枝 籠の鈴虫髭をふりつつ 喜久子  
夷 秋簾衣桁にかけし男物 喜久子  
麻 傘も持たずに出づる口惜しさ 孝  
麻 赤坂にフランス料理の店開く 喜  
麻 マロニエの花咲きしアベニュー 風  
夷 病める娘の絵筆進まず月涼し 喜  
郁 世を騒がせて送る毒薬 孝  
一 識者とは知つたかぶりと聞きてをり 孝  
一 餅は餅屋にわれは厨に 孝  
枝 女から女に伝ふ電の火 風  
同 影おぼろなり下京の辻 孝  
郁 山寺の法事の知らせ花曇り 喜  
麻 生れし蠅をしたたかに打つ 孝  
一 反核を掲げて高しメーデー歌 喜  
枝 振り返り見る路地の三毛猫 喜  
夷 叱らるる覚悟初めてパーマかけ 風  
ゑ 神の御留守にはしやぐ悪戯鬼 孝  
麻 見世物のお化け屋敷に時雨降り 孝

著 夏の日 角川書店 (絶版) 700円  
明雅 連句入門 中公新書508号 価 380円  
芭蕉の恋句 岩波新書91号 価 320円  
東 猫蓑 永田書房 価 2300円

一番の鳩に又一羽来て  
ワシコフにかしづく女身の細く  
縊りのもどればさらに陸まじ  
逆さまに街の見えしは錯覚か  
落ちゆく鮎の夢のはかなき  
月澄めば命をこぼす砂時計  
石突き残し松茸をもぐ  
南北の朝鮮和む板門店  
酒つぎ回る翁賑やか  
町会に顔だけ出して出たことに  
群雀たつ昼の井戸端  
旅の荷を解くやどつと花疲れ  
ぼんとはじてゆらす風船

連句会案内

。連句教室 会費千円  
日時 第一日曜日午後一時―五時  
会場 関口芭蕉庵  
文京区関口二ノ十一ノ三  
(電) 九四一一―一四五  
。A・C・Cゼミナール  
日時 第二・四水曜午後一時―三時  
会場 新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
新宿区西新宿二ノ六ノ一  
(電) 三四四―一九四一(代表)  
入会金 五千円  
受講料 一万一千四百円(三ヶ月)  
二万二千円 (六ヶ月)  
。猫蓑会(会員制)  
年四回  
(二月 四月 七月 十月 第三水曜日)  
会場 松声閣  
文京区新江戸川公園内  
(電) 九四一一―九六四九

雁帛往来

▽事はすこし旧聞にぞくするが、関西俳句会の泰斗橋間石師(白燕主宰)が、句集「和栲」をもって蛇笏賞を受賞された。師は無名庵方堂の弟子として、俳諧でも著名であり、故根津芦丈師との風交もあった。その高潔な人格と老艶のみずみずしさは、まさに鶏群の一鶴の感じがする。遅ればせながら師の御受賞を祝し、益々の御健吟を祈るものである。

▽俳壇では「芭蕉の新しい人間探究」がまたさかになる兆しか、明雅師は乞われて左の各地で「芭蕉の恋句」の主題で講演をされた。  
俳句講座 (聴衆 九〇人)  
於東京都新宿区百人町 俳句文学館  
十月十二日  
第二〇回 柳井市短詩型文学祭(六〇人)  
於柳井市中央公民館 十月十四日  
第二十六回 千葉県俳句大会(百二〇人)  
於千葉コミュニティセンター十月廿一日  
▽柏連句会への招待  
柏連句会は毎月第二日曜日、柏市光ヶ丘

(南柏駅よりバス、光ヶ丘下車)の光ヶ丘近隣センターで、午後一時より興行している。連衆は柏近在に居住する方を中心とする立前であるが、東京あたりからの方々の参加も歓迎している。会費無料。  
この会は三年前から、柏市つくしが丘の東明雅宅で行なわれ、「葛飾連句会」と称していたが、今春から場所と名称を変えて、再出発することになった。捌きは都心連句会の大林柚平宗匠にお願いしているから、猫蓑会の捌きとは同じ芦丈系の連句で、参考になるところが多い。

「季刊連句」第七号定価五百円  
誌代 年二千円(送共)  
発行 昭和五十九年十二月一日  
編集・発行人 東 明雅  
季刊「連句」発行所  
〒277柏市つくしが丘二ノ二ノ一二  
電話 〇四七二(七五)一一九二  
振替口座 東京 七一五二二三三  
印刷所 神谷印刷株式会社  
東京都豊島区高田一ノ六ノ二四  
電話〇三(九八)〇一七二一一五